

古

蘭

(下)

第二十一章より第百十四章まで

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 第二十一 予言者章

メッカ啓示

古来の諸予言者について述ぶるに因みて予言者章 *Al-Anbīya* と名づけらる。諸予言者のうちアブラハムに就て語るところ最も多し。メッカ中期の啓示とせらるるも、全章に一貫の脈絡なく、年代を異にせる諸啓示を集録せるものにして、メデナ遷都以後の諸節、並に遷都以後に加筆せられたるメッカ諸節を含むこと前諸章と同じ。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

人々が忌避して顧みざる間に、彼等の清算は近づけり▲ 其主よりの新たなる訓誡が彼等に来る毎に、彼等之を聴いて嘲笑せずといふことなし▲ 彼等は心中に之を愚弄するなり。而して不義を行ふ者は密かに相語りて曰く『こは汝等と等しく一個の人間に非ざるか。何事ぞ、汝等目を開きながら魔術に迷はざるか』と▲ 言へ『吾主は悉く天地の間に話さるることを知る。吾は能聞者・能知者なり』と▲ 否な、彼等は言へり『それは夢の錯乱なり。否な、彼之を偽作せるなり。否な、彼は詩人なり。されば往時の民に諸使者が遣はされたる時の如く、彼にも吾等に休徴を齎さしめよ』と▲ 彼等以前にわが亡ぼせる都府も、一として信じたるはなかりき。彼等果して信ずべきか▲

### 第二十一 予言者章

汝以前にわが遣はせる者は、一としてわれ之に黙示を与へたる人間に非ざりしはなし。汝等之を知らずば訓誠を受けたる民に問へ<sup>②</sup>▲ 吾は彼等を食物を損らざる身軀に造らず、また彼等是不死にも非ざりき▲ 而も吾は彼等に与へたる約束を完うし、彼等並にわが欲する者を救ひて、暴虐なりし者を亡ぼしたり▲ 吾は汝等への訓誠を載せたる經典を汝等に降せるなり。汝等尚ほ曉らざるか▲

- (1) 前段並に此の一段は、ベルに従へばメッカ末期の諸啓示にメデナ初期のそれを加へて整頓せるものなり。  
(2) 猶太人並基督教徒。

われ如何に多くの不義を行へる都府を亡ぼし、別個の民を其後に挙げたることぞ▲ 彼等わが懲罰を見たる時、げに倉皇として都府より遁走したり▲ 時に声あり曰く『走る勿れ、汝等が榮華に暮らせる都府に還れ。汝等の住居に帰れ。想ふに汝等は糾問せらるべし』と▲ 彼等曰く『悲しいかな。げに吾等是不義者なりき』と▲ 而してわれ彼等を刈取れる穀類の如く消滅せしむるまで、彼等の此の叫喚は止まざりき▲ 吾は娛樂のために天地並に天地間の万物を創造せるに非ず▲ 吾若し娛樂を欲しなば、吾は吾自身のうち之を求むべし。吾は断じて之を為さず▲ 否な、吾は真理を虚偽に擲<sup>な</sup>げて其頭を砕く。而して見よ。虚偽は忽ち消滅す。禍なるかな汝等が(アルラーハについて) 称ふることは▲

- (1) 前段及び此の一段は、ベルに従へばメデナ啓示なり。

天地間の一切のものはアルラーハに属す。彼と偕に在る者は、彼に事へて驕らずまた倦まず▲ 彼等は夜毎日毎彼を讀へて懈ることなし▲

- (1) 彼と偕に在る者とは天使なり。独り人間のみならず、天使もアルラーハに事ふることを言ふ。

彼等は死者を甦らしむる神々を地上より選べるか▲<sup>三</sup> 若し天地の間にアルラーハ以外の神々ありとすれば、天地は必ず混沌たるべし。されば王座の主アルラーハを讃へよ、彼は高く彼等の称ふるものに超在す▲<sup>三</sup> 彼は其の為すことについて問はるることなし。問はるるは即ち彼等なり▲<sup>三</sup> 彼等はアルラーハ以外に神ありとするか。言へ『汝等の証拠を示せ。こはわが同代の者並に吾が前代の者に与へられたる訓誡なり』と。否な、彼等の多くは真理を知らず。故に彼等は之を忌避す▲<sup>四</sup> 汝以前に吾が遣はせる使者は、一人として吾之に『吾の外に神なし、されば吾に事へよ』と黙示せざりしはなし▲<sup>五</sup>

彼等曰く『アルラーハに子女あり』と。<sup>(1)</sup> 彼を讃へよ、然らず。<sup>(2)</sup> 彼等は敬ふべき僕等なり▲<sup>三</sup> 彼等は彼に先んじて物言ふことなく、唯だ彼の命を奉じて行ふ▲<sup>三</sup> 彼は彼等以前にあるもの並に彼等以後にあるものを知る。彼等は主の欣ぶ者のために非ずば勸解せず。彼等は彼を畏れて戦く▲<sup>三</sup> 若し彼等のうちに『吾は彼以外の神なり』と言ふ者あらば、吾必ず地獄を以て其者に報いん。吾は是くの如くにして不義者に報ゆ▲<sup>五</sup>

(1) 天使を以て神女なりとするアラビア人の信仰を否認するものなり。

(2) 彼等とは即ち天使。

天と地とはもと固結せる一躰なりしを、吾之を開闢し、且吾は水を以て一切の生類を創造せり。信ぜざる者は此事を思はざるか。彼等尚ほ信ぜざるか▲<sup>三</sup> 吾は地上に群山を置きて、大地を彼等と共に動揺せざらしめ、且彼等が正しく導かれんがために其中に大道を造れり▲<sup>三</sup> 吾は天を以て堅固に支へられたる屋宇となせり。然るに彼等は其の種々なる休徴を忌避す▲<sup>三</sup> 而して昼夜を創り、各其の軌道を走る日月を創れるもまた彼なり▲<sup>三</sup>

吾は汝以前の如何なる人間をも未だ曾て不死とせることなし。何事ぞ、汝は死ぬべきものなるに、彼等は永

遠に生くるとするか<sup>▲四</sup> 各人皆な死を味はしめらる。吾は禍福を以て汝等を試む。而して汝等吾に帰らしめらる<sup>▲五</sup>

信ぜざる者が汝を見る時、彼等は唯だ汝を以て嘲笑の的とす。曰く『汝等の神々について云々するは此者なるか』と。彼等は大悲者の訓誡を信ぜざるなり<sup>▲六</sup> 人は性急に創られたり。吾將に汝等に休徴を示さんとす。されば汝等吾に催促すること勿れ<sup>▲七</sup> 彼等曰く『汝等の言真実ならば、此の威嚇の実現せらるるは何時ぞ』と<sup>▲八</sup> 若し信ぜざる者が其日を知りたりせば！ 其時彼等は其面より、また其背より猛火を防ぐ能はず、また救はるることを得ざるなり<sup>▲九</sup> 否な、そは突如彼等を襲ひて彼等を驚倒せしむべし。彼等は之を忌避すること、また猶予せらるることなからん<sup>▲一〇</sup> げに汝以前の諸使者も嘲笑せられたり。されど復活の日に於て、彼等の嘲笑せることが彼等を圍繞すべし<sup>▲一一</sup>

言へ『昼夜大悲者に対して汝を護る者は誰ぞ』と。否な、彼等は其主の訓誡を忌避す<sup>▲一二</sup> 彼等は吾以外に己れを守護する神々を有するか。此等の神々は己れ自身をも護ること能はず、また吾に対して彼等を護ること能はず<sup>▲一三</sup> 吾は此等の民並に其の祖先に安樂を与へ、その生存を永からしめたり。彼等はわれ此地に來りて其の辺境を縮小しつつあるを見ざるか。<sup>▲一四</sup> 彼等果して勝利者なるか<sup>▲一五</sup>

(1) 第一八章第四一節参照。

言へ『吾は唯だ黙示によりて汝等を警告するのみ』と。されど讐者は警告せらるるも招呼の声を聞かず<sup>▲一六</sup> 而も汝の主の懲罰が些かにても彼等に触ることあれば、彼等必ず言はん『悲しいかな、げに吾等是不義者なりき』と<sup>▲一七</sup> 吾は復活の日に公平なる秤を置く。されば何人も不当に遇せらるることなし。設ひ芥子一粒の重さなりとも、吾必ず之を取り出でて量らん。吾は清算者として欠くところなし<sup>▲一八</sup>

吾はモーゼとアロンとに識別（フォルカーン）と光明と其身を護る者への訓誡とを与へたり▲四八 彼等は密かに其主を畏れ、復活の日を念ひて心戦く者なり▲四九 而して此の古蘭は、わが降したる祝福せられたる訓誡なり。然るに汝等尚ほ之を拒むか▲五〇

吾は曾てアブラハムに正しき道を与へたり。そはわれ彼を熟知せるが故なり▲五一 彼が其父並に其民に告げて是く言へる時を念へ『汝等が拝する此等の偶像は何者ぞ』と▲五二 彼等曰く『吾等は吾等の祖先が之を拝するを見たり』▲五三 彼曰く『汝等並に汝等の祖先は明かに誤れり』▲五四 彼等曰く『汝は真実を吾等に語らんとするか、又は吾等に戯るる者の一人なるか』▲五五 彼曰く『然らず、汝等の主は天地の主なり。而して吾は其の証人の一人なり』▲五五 神かけて言ふ、汝等踵を回して其背を吾に示せる後、吾必ず汝等の偶像に対して策を施さん』と▲五五

かくて彼は唯だ一軀の巨像を除き、悉く彼等を破砕し去れり。そは彼等之に帰り来るべしと思へるが故なり▲五六 彼等曰く『吾等の神々に対して此事を敢てせる者は誰ぞ。げに彼は不義者の一人なり』▲五七 他の者曰く『吾等はアブラハムと呼ぶ青年が、此等の神々について語るを聞けり』▲五八 彼等曰く『さらば彼を人々の前に伴ひ来れ。恐らく彼等証人とならん』と▲五九

彼等曰く『吾等の神々に対して此事を為せるは汝なるか、アブラハムよ』▲六〇 彼曰く『然らず、神々のうちの此の巨大なる者が之を行へるなり。彼等若し物言はば、此事を彼等に問へ』▲六一 かくて彼等自ら省みて曰く『吾等自身こそ不義者なりけれ』と▲六二

然るに幾くもなく彼等また顛倒して曰く『汝は此等の神々が物言はざることを熟知す』と▲六三 彼曰く『然らば汝等は毫も汝等を損益せざる者をアルラーハ以外に拝するか』▲六四 晒ふべきかな汝等並に汝等がアルラーハ以外に拝する神々は。汝等尚ほ暁らざるか』▲六五 彼等曰く『汝等に覚悟あらば、彼を焚きて汝等の神々を救

へ』と▲▲

(1) 俄かに意見を翻して復た多神教徒となれることを言ふ。

其時吾曰く『火よ、冷涼なれ。アブラハムは安泰なれ』と▲▲ 彼等更にアブラハムに対して策動せんとせしが、吾は彼等を淪喪者たらしめたり▲▲ 吾は彼並にロトを救ひ、万人のために彼等を吾が祝福せる国土に移したり▲▲ 而して彼にイサクと孫ヤコブとを与へ、等しく之を義人とせり▲▲ 吾は彼等を以て吾命を奉じて人を導く教師となし、善事を行ひ、礼拝を守り、捐課を納め、専ら吾にのみ事ふべきことを黙示せり▲▲

(1) 偽承(の偽承か)によれば、アブラハムはニムロド王のために火刑に処せられたるも、神助によりて一命を助かりたりとせらる。

(2) 聖地即ちパレスチナを指す。

ロトについて言へば、吾は智慧と知識とを彼に与へ、且穢らはしき事を行へる都府より彼を救ひたり。げに彼等は不善にして背逆の民なりき▲▲ 而して吾は慈悲を彼に垂れたり。彼は義人の一人なりき▲▲

ノアについて言へば、曾て彼が吾に祈れる時、吾之に応へて彼並に彼に従へる者を大なる災難より救ひたり▲▲ 吾はわが休徴を虚偽なりとせる民に対して彼を佑助せり。げに彼等は悪き民なりしかば、われ悉く之を溺死せしめたり▲▲

ダビデ並にソロモンについて言へば、或者の羊が夜間田圃に入りて之を荒せし時、彼等之を裁判し、吾は其の裁判の証人なりき▲▲ 吾は之をソロモンに曉らしめたり。而して吾は各自に智慧と知識とを与へたり。またダビデには吾を讃美するために群山と飛鳥とを従はしめたり。之を為せるは実に吾なり▲▲ また吾は汝等のために甲冑を作ることを彼等に教へ、征戦に際して汝等の身を護らしめたり。汝等之を感謝するか▲▲

た吾は大風をソロモンに従はしめ、その命令の下に之をわが祝福せる地に吹かしめたり。吾は万事を知る▲<sup>三</sup>またサタンのうちに常に彼のために潜水せる者あり、また他の仕事を為せる者もありて、吾常に彼等を監視せり▲<sup>三</sup>

- (1) 伝承によれば、此の裁判に当りて、ダビデは田圃の持主が損害賠償として羊を牧羊者より受取るべしと判決せり。然るに当時十一才の少年なりしソロモンは、牧羊者は其の羊が荒廃せしめたる田圃が復旧するまで、羊の生産品即ち乳・毛・仔羊等を田圃所有者に提供すべしと主張し、ダビデも之に従へりとせらる。
- (2) 之を曉らしむとは、如何なる判決を下すべきかを解悟せしめたること。
- (3) 伝承は風が常にソロモンの王座を運びて、其の欲する処に到らしめたりとなす。
- (4) 海に潜りて珊瑚・真珠等を採取せる外、陸上の仕事例へば宮殿の建築、道路の建設等に従へりとの意味。

ヨブについて言へば、かれ其主を喚びて『艱難吾に臨めり、汝は大悲者中の至悲者なり』と祈れる時▲<sup>三</sup>吾之に応へて彼を襲へる艱難を除き、其の失へる家人のみならず、更に同数の人々を加へて之を彼に与へたり。これ吾が慈悲にして、敬虔なる人々への訓誡なり▲<sup>四</sup>イシマエル、イドリース、ゾールキフルについて言へば、彼等皆な能く耐え忍びたれば▲<sup>五</sup>吾は彼等に慈悲を垂れたり。げに彼等は義人なりき▲<sup>六</sup>

- (1) ゾールキフル <sup>Zeulki</sup> は或はヨシユア、或はエリア、或はザカリアと同一人視せられ、ロッドウエルはニールの旅行記を典拠としてエゼキエルならんとせり。

ゾーンヌンについて言へば、彼一旦は激怒して去り、吾は彼に対して何事をも為し得ずとせしが、後に黒闇の中にありて叫んで曰く『汝の外に神なし。栄光汝の上にあれ。げに吾は不義者の一人なりき』と▲<sup>七</sup>され

ば吾は彼に応へ、之を其の苦難より救ひたり。吾は是くの如く信者を救ふ▲<sup>八</sup>

(1) ズーンヌン *zūn-nun* は『魚の主』を意味し、ヨナのことを指す。

(2) ヨナが大魚に吞まれ、魚腹の黒闇中に祈れること。

ザカリヤについて言へば、かれ其主に向つて『主よ、汝は最勝の相続者なり。されど吾を子なきままに遺す勿れ』と祈れる時▲<sup>九</sup> 吾は之に応へて彼にヨハネを与へ、其妻を彼に適はしめたり。げに彼等は競ひて善事行ひ、憧憬し畏懼して不断に吾に祈り、吾前に謙虚なりき▲<sup>九</sup>

(1) 其妻の不妊を癒やせることを意味す。

その隠すべき処を護れる女子について言へば、われ彼女に吾霊を鼓吹し、彼女並に其子を以て万人への休徴となせり▲<sup>九</sup> (而して吾は是く黙示せり) 『げに汝等の此教は同一不二の教なり、而して吾は汝等の主なれば、汝等唯だ吾のみに事へよ』と▲<sup>九</sup> 然るに彼等其教を彼等の間にて分割せり。されど彼等は皆な吾に帰る▲<sup>三</sup> かくて信じて善事を行ふ者は、決して其の精進を空しくせらるることなし、吾は其人のために必ず之を記録せん▲<sup>九四</sup>

(1) マリアを指す。隠すべき処を護るとは貞潔の意味。

(2) 猶太教と基督教とに分裂せることを言ふ。

(3) 第四八節以下此節に至る諸予言者についての物語は、メッカ啓示に対してメチナ遷都以後訂正を加へたるもの、並にメチナ遷都以後の諸節を集成せるものとすべし。

わが滅ぼしたる諸都府は、ヤージュージ・マージュージが解放せられて高丘より奔下し来るまでは、其の再

び世に復ることを禁ぜらるる▲<sup>九五</sup>。而して真実なる約束は近づけり。見よ、其時信ぜざりし者は瞠目して言はん『悲しいかな、吾等は此事を閑却せり。否な、吾等是不義者なりき』と▲<sup>九七</sup>

(1) 北方の蛮族が破竹の勢を以て南下し来ることを指せるものとすべし。ヤージュージ・マージュージの侵入は復活の日が近づける時に起る凶兆の一とせらる。

げに汝等並に汝等が拝する者は、やがて堕ち往く地獄の薪たるべし▲<sup>九八</sup> 彼等若し神々なりせば、地獄には堕ちざるべし。されど彼等は堕ちて永劫に其中に住まん▲<sup>九九</sup> 彼等其中にて呻吟せん。また彼等其中にて(何事をも)聞かざらん▲<sup>一〇〇</sup>

げに吾よりの善賞既に定められたる者は、遠く地獄より移され▲<sup>一〇一</sup> 絶えて其音を聞かず、その魂が憧憬したる処に永く住まん▲<sup>一〇二</sup> 至大の恐怖も今は彼等を悩ますに足らず、諸天使は彼等を迎へて言はん『これは約束せられたる汝等の日なり』と▲<sup>一〇三</sup> 其日吾はスイジルが書卷を捲く如く諸天を捲き、初めに之を創造せる如く、再び之を創らん。これわが負へる約束なり。吾必ず之を果たさん▲<sup>一〇四</sup> げに吾は訓誡を与へたる後に、詩篇の中に是く記せり『正義のわが僕等、地を嗣がん』▲<sup>一〇五</sup> げに此中には神に事ふる者への教訓あり▲<sup>一〇六</sup>

(1) スイジル<sup>Swisil</sup>は、人間の行状記を管理する天使の名とせらる。

(2) モーゼに律法<sup>ダウタ</sup>を与へたる後に、ダビデに詩篇を与へたりとの意味。旧約詩篇第三十二章第二九節。古蘭に引用せられたる聖書中の唯一の句。

吾は唯だ三界への慈悲として汝を遣はしたるのみ▲<sup>一〇七</sup> 言へ『吾に黙示せられたるは、唯だ汝等の神は独なりといふことのみ。汝等果して帰命するか』と▲<sup>一〇八</sup> 彼等若し背き去らば言へ『吾は一律に汝等に宣言せり。されど吾は汝等に約束せられたることの近きか又遠きかを知らず』▲<sup>一〇九</sup> げに彼は公然の言を知り、また汝等が

匿すことを知る▲二〇 吾はまた此事が汝等の試練なるか、また現世の享樂が暫時なるかをも知らず』と▲二一  
言へ『主よ、真理によつて審判せよ。吾等の主は大悲者なり。吾等は彼等の称ふることに対して彼の佑助を求  
む』と▲二三

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 第九十六 凝血章

メツカ啓示

第二節に『一凝血より人間を創れり』とあるに因みて凝血章 *Al'Alag* と名づけらる。本章の最初の五節は、マホメットが、ヒラー山上に於て受けたるものにして、全古蘭を通じて最初の啓示とせらる。但し第六節以下は其後の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

創造者なる汝の主の名を奉じて読め<sup>①</sup>▲ 彼は一凝血より人間を創造せり▲ 読め、汝の主は至仁なり▲ 彼は筆にて教へたり▲ 彼は人間にその未だ知らざることを教へたり▲

(1) 『読め』と繰返されたるは、マホメットが最初に読めと告げられし時、吾は読む能はずと答へたるによるとせらる。

然り、げに人間は不遜なり▲ そは自ら富めりとするが故なり▲ げに万人は汝の主<sup>②</sup>に復帰す▲ 一人の僕が礼拝せる時、汝は之を禁めたる者を見ざりしか▲ 汝は彼を以て正しく導かるる者とするか▲ また信心を勧むる者とするか▲ 汝は彼を以て真理を虚偽なりとして背き去れる者とするか▲ 彼はアルラーハが

照覧することを知らざるか▲<sup>四</sup> 然り、彼若し止めずば、吾は彼の前髪▲<sup>五</sup> 虚偽罪惡の前髪を掴まん▲<sup>六</sup> さらば彼をして其の同類を喚ばしめよ▲<sup>七</sup> 吾また地獄の守衛者を喚ばん▲<sup>八</sup> 否な、断じて彼に従ふ勿れ、叩首して主に近づけ▲<sup>九</sup>

(1) 『人間』は一般的意味に用ゐられたるものと解釈し得るも、多くの回教註釈家はアブー・ジャハルを指せるものとなす。

(2) 『二人の僕』とは、多くの註釈家によりてマホメットを指し、之を禁めたる者とはアブー・ジャハルを指すとせらる。但しネルデケは、開教当初に最も多くマホメットに帰依したる奴隸を意味するものとなせり。メッカに於て最も甚だしく迫害せられたるは此等の奴隸なり。

(3) 原語は『会議 An-Nad』。市民會議に列席するメッカの有力者を指す。

(4) 原語 Az Zabanyah は守衛者・護衛者の意味。マールイクを指揮者として地獄を守護する天使を指す。

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 第九十七 稜威章

メッカ啓示

第一節に『吾は稜威の夜に古蘭を降したり』とあるに因みて稜威章 *Lailat' l-Qad* と名づけらる。稜威の原語カドルは壮嚴・偉大・偉力を意味し、マホメットがヒラー山上に最初の天啓に接したる夜を『稜威の夜 *Lailat' l-Qad*』と称す。ラマザーン月下旬の一夜なり。極めて初期のメッカ啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

げに吾は稜威の夜に古蘭を降したり▲一 稜威の夜の何たるかを汝に知らしむるものは何ぞ▲二 稜威の一夜は千月に優る▲三 此夜、諸天使並に聖霊は、其主の命を奉じ、一切の命令を携へて降臨せり▲四 黎明の現るるまで夜は平安なり▲五

## 第九十八 明証章

メヂナ啓示

第一節以下に『明証』について述ぶるに因みて明証章 Al-Bayyinah と名づけらる。明証とはマホメットを指す。メッカ末期の啓示とするものもあるも、メヂナ啓示なること殆ど疑なく、恐らく遷都初年の啓示なるべし。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

受経者のうちの信ぜざる者並に多神を拝する者は、明証が彼等に来るまでは離反せざりき▲一 明証とは、純正なる記載を含める清浄なる書冊を誦するアルラーハの使者を謂ふ▲三 又受経者等は、明証が彼等に来るまでは、宗派に分れざりき▲四 彼等に命ぜられたることは、唯だアルラーハに事へ、堅信者として専ら彼を敬ひ、且礼拝を守り、捐課を納むることに外ならざりき。而してこれ実に真実の宗教なり▲五

げに受経者のうちの信ぜざる者並に多神を拝する者は、必ず獄火の中に堕ち、永劫に其中に住まん。此等は一切衆生中の最悪者なり▲六 信じて善事を行ふ者は、一切衆生中の最善者なり▲七 彼等の報賞は主の許にあり、即ち河川流るるエデンの楽園なり。彼等長久に其中に住まん。アルラーハは彼等を欣び、彼等はアルラーハを欣ぶ。これ主を敬ふ者への報賞なり▲八

## 第九十九 地震章

メッカ啓示

第一節に『大地激しく震ひ』とあるに因みて地震章 *Ar-Rizā* と名づけらる。極めて初期のメッカ啓示。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

大地激しく震ひ▲ 大地その重荷を擲ち▲ 人は『地に何事が起れる』と言ふ時▲ 其日大地は諸の消息を  
伝へん▲ そは汝の主が之を命ずるが故なり▲ 其日、人々は己れの所行を見るために、諸の団体に分れて進  
み来らん▲ 微塵の善にても行へる者は其善を見るべく▲ 微塵の惡にても行へる者は其惡を見るべし▲

## 第百 戦馬 章

メッカ啓示

第一節に『戦馬によりて誓ふ』とあるに因みて、戦馬章 *ḥimār* と名づけらる。原語は『疾駆者』の意味にして、或は之を以て駱駝を指すとする学者あるも、予は多くの註釈家に従ひて戦馬と解せり。極めて初期のメッカ啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

鼻息荒く疾駆して、鉄蹄火花を散らす戦馬によりて▲<sub>三</sub> 黎明に出撃して▲<sub>三</sub> 砂塵を揚げ▲<sub>四</sub> 戦陣に殺到する戦馬によりて誓ふ▲<sub>五</sub> げに人間は其主に対して忘恩なり▲<sub>六</sub> げに彼はその証人なり▲<sub>七</sub> げに彼は財宝を酷愛す▲<sub>八</sub> 彼は知らざるか、墓中のものが暴露せられ▲<sub>九</sub> 胸中のこと悉く露顕する時あるを▲<sub>一〇</sub> げに其日、主は悉く彼等について知らん▲<sub>一一</sub>

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

第一百一打擊者章

メツカ啓示

第一節に『打撃者』とあるに因みて打撃者章と誤り、と名づけられる。打撃者とは末日を意味す。極めて初期のメッカ啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

打撃者！▲一 打撃者とは何ぞ▲三 打撃者の何たるかを汝に知らしむるものは何ぞ▲三 其日、人は四散する蛾  
 の如く▲四 山は梳すかれたる羊毛の如くならん▲五 秤衡重き者▲六 彼には多幸の生活あり▲七 秤衡軽き者▲八 彼  
 の母はハーキヤなり▲九 (節婦孝子傳 原典より) ハーキヤの何たるかを汝に知らしむるものは何ぞ▲九 そは烈火なり▲一〇

(1) 母とは住処の意味。ハーキヤ Al-Hawja は深処の意味。地獄の至深処にある牢獄の名。

## 第二百二 競多章

メッカ啓示

第一節に『多きを競ふことに惑はさる』とあるに因みて競多章 At-Takasur と名づけらる。極めて初期のメッカ啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

汝等は墓に入るまで、多きを競ふことに惑はさる▲三 不可なり、汝等やがて之を知らん▲三 断じて不可なり、汝等やがて之を知らん▲四 不可なり。汝等確かに之を知りたりせば！▲五 そは汝等獄火を見るべきが故なり▲六 然り、汝等確実なる目にて之を見ん▲七 げに其日汝等は現世の歓楽について問はれん▲八

SAMPLE  
ShoshiShinsui.com

## 第三百三 午後章

メッカ啓示

第一節に『午後によりて誓ふ』とあるに因みて午後章 *Ḥaḥmaḥ* と名づけらる。午後の原語アスルは『時代』の意味あるが故に『時代章』とも訳すべし。極めて初期のメッカ啓示にして、マホメットはその臨終に際し、本章第二節を復誦せりと伝えらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて  
午後によりて誓ふ▲<sub>二</sub> げに人は滅亡の中にあり▲<sub>三</sub> 唯だ信じて善事を行ひ、互に真実を励み、忍耐を励む者  
を除く▲<sub>三</sub>

## 第四百 誹謗者章

メッカ啓示

第一節に『誹謗を事とする讒誣者』とあるに因みて誹謗者章 Al-Humazah と名づけらる。メッカの有力者は、同市に来る者を路に要し、マホメットの説教を聴かざらしめんがために種々なる讒謗を事とせり。本章はその当時の啓示にして、メッカ初期のものに属す。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

禍なるかな一切の誹謗を事とする讒誣者は▲  
しむべしと思惟す▲  
断じて然らず。彼はホタマハの中に投ぜられん▲  
ホタマハの何たるかを汝に知らしむるものは何ぞ▲  
そはアルラーハが燃やす火なり▲  
そは胸の上まで燃えさからん▲  
そは長大なる円柱に支へられたる▲  
彼等を蓋ふ供路の如くなるべし▲

(1) ホタマハ Al-Humazah は破碎の意味にして地獄の一名なり。之に投ぜらるれば悉く粉碎せらるるを以て此名あり。

## 第二百五 巨象章

メッカ啓示

第一節に『巨象の所有者』とあるに因みて巨象章 نور と名づけらる。西紀五七〇年のころ、ヤマ  
ンに君臨せるアビシニアの將軍アブラハ Abraha は、メッカ征服を企てて北上せしが、軍中に巨象を伴  
ひたり。この巨大なる動物は深刻なる印象をメッカ人に与へ、ために此年を『象の年』と呼ばしむる  
に至れり。されど遠征軍は猛烈なる天然痘に襲はれ、得るところなくして南歸せり。マホメットは此  
年に誕生せりと言はる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

汝は見ざるか、汝の主が如何に巨象の所有者を処分せるかを▲一 彼は彼等の戦略を混乱せしめ▲二 群鳥を彼  
等の上に降して▲三 泥石を之に擲下せしめ▲四 遂に彼等を噛み荒らされたる茎の如くならしめたるに非ずや▲五

## 第百六 クライシュ族章

メッカ啓示

第一節に『クライシュ族の保護のためなり』とあるに因みてクライシュ族 Al-Qurash と名づけられ、第二節の『冬期の隊商』に因みて冬期章 Ash-Shita と名づけらる。極めて初期のメッカ啓示なり。

大悲者・大悲者アルラーハの名によりて

クライシュ族の保護のためなり▲<sup>①</sup> 冬期並に夏期の彼等の隊商の保護のためなり▲<sup>②</sup> されば彼等をして聖殿の主を拝せしめよ▲<sup>③</sup> 主は飢えたる時に彼等を養ひ▲<sup>④</sup> 恐れたる時に彼等を安んじたり▲<sup>⑤</sup>

(1) 前章を承けて、アブラハが空しく軍を回したるは、アルラーハがクライシュ族を保護せんがためなりとするなり。

(2) 毎年夏冬二回の隊商派遣の制度を定めたるはマホメットの祖父ハーシム Hashim なり。

## 第七 布施章

メッカ啓示

第七節に『布施を拒む者』とあるに因みて布施章 *Al-Baqara* と名づけらる。布施の原語 *マアウーン* は、もと日用の家具又は必需品の意味なるも、法定の捐課並に任意の喜捨を含めて、財物を施与することを意味するに至れり。極めて初期のメッカ啓示。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

汝はかの審判を虚偽なりと言ふ者を見ざるか▲一 孤鬼を驅逐する者は彼なり▲二 彼はまた相促して貧者を養ふことなし▲三 禍なるかな、礼拝するも▲四 礼拝を忽せにする者▲五 信神を粧ひて▲六 布施を拒む者は！▲七

## 第百八 潤 沢 章

メ ッ カ 啓 示

第一節『吾は汝に潤沢を与へたり』とあるに因みて潤沢章 *Al-Nasir* と名づけらる。潤沢の原語カーウサルは、一切の善きものが潤沢なる意味にして現世並に来世の幸福を含む。同時にそは楽園の一河の名称にして、其水は蜜よりも甘く、麝香よりも香しく、乳よりも白く、一たび之を飲めば永久に渴くことなしとせらる。本章はマホメットの二子アルカーシム *Al-Qasim* が夭死せる時、アース・イブン・ワイル *As ibn Wail* なる者が、之を以て天譴なりと唱へ、市民に向つて彼の宗教に入るべからずと宣伝せる所に降されたる啓示とせらる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

げに吾は汝に潤沢を与へたり▲ されば汝の主に祈り、供儀を行へ▲ 汝を憎む者には絶えて子女なからん▲

SAMPLE  
Shosni-Shinsui.com

## 第百九 不信者章

メッカ啓示

第一節に『汝等不信者よ』とあるに因みて不信者章 *Al-Kāfirūn* と名づけらる。メッカ初期の啓示にして、メッカの有力者がマホメットに向つて妥協を提議せるころのものと思はれる。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

言へ『汝等不信者よ』▲一 吾は汝等が事ふる者に事へず▲二 汝等はわが事ふる者に事へず▲三 吾また汝等が事ふる者に事へざるべし▲四 汝等に汝等の教あり、吾に吾教あり』と▲五

## 第一百 佑助 章

メデナ啓示

第一節に『アルラーハの佑助と勝利と来る時』とあるに因みて佑助章 *Yusuf* と名づけらる。マホメットの長逝数週間以前に降されたるメデナ最末期の啓示なるも、往々にしてメッカ啓示とせらるるは、之を以てマホメットがその最後のメッカ参詣中に降されたるものとするが故なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて  
アルラーハの佑助と勝利と来りて▲ 人々相率ゐてアルラーハの教に入るを見る時▲ 其時汝の主を讃へて、  
その宥恕を乞へ。げに彼は允懺悔者なり▲

SAMPLE  
Shoshi-Shinshui.com

## 第百十一 アブー・ラハブ章

メッカ啓示

アブー・ラハブ夫妻を呪咀するが故にアブー・ラハブ章 Abu Lahab と名づけらる。彼はマホメットの伯父にして、一族のうち夫妻協力してマホメットに敵せること彼等より甚だしきはなし。伝承は下の如く語る。マホメットがその一族を集めて己れがアルラーハより選ばれたる警告者なることを告げた時、アブー・ラハブは啻に彼の使命を拒否せるのみならず、『汝は是くの如きことのために吾等を招きたるが、汝の如きは死に当る』と罵り、石を拾ひて彼に投ぜんとせり。この啓示は此事ありたる後に降されたりと。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

アブー・ラハブの双手は滅び、彼また滅びん▲  
その富は彼を益せず、その所得また然り▲  
彼は烈焰の火に燔かれ▲  
薪を負へる其妻また然らん▲  
彼女の頸には褰皮の縄かかるべし▲  
五

## 第一百十二 独 一 章

メッカ啓示

アルラーハの独一なるを説くが故に独一章 *Al-Ilahis* と名づけらる。古蘭の神髄とせられ、マホメットは此の一章能く全古蘭の三分の一に当ると言へりと伝へらる。メッカ初期の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

言へ『アルラーハは独一者なり』▲ アルラーハは所依者なり<sup>(1)</sup>▲ 彼は産まず、また産まれず▲ 彼に対等者なし』▲

(1) 『所依者』の原語はサマド *As-Samad* にして、一切が之に依存する者の意味。

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 第百十三 暁 天 章

メツカ啓示

第一節に『吾は暁天の主に加護を求む』とあるに因みて暁天章と Fuiaq と名づけらる。初期のメツカ啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

言へ『吾は暁天の主に加護を求む』▲ 主が造る災厄に対して▲ 黒闇加はる夜の災厄に対して▲ 瀬を吹く女子の災厄に対して▲ 並に嫉妬する嫉妬者の災厄に対して』▲

(1) 糸の結目を吹き、呪咀せんとする者の名を唱へて災厄を呼ぶ女子。当時のアラビアに普く行はれし迷信なり。

## 第百十四章 人類章

メッカ啓示

第一節に『人類の主』とあるに因みて人類章 *Human Chapter* と名づけらる。メッカ初期の啓示なり。

大悲者・大慈者アルラーハの名によりて

言へ『吾は人類の主▲ 人類の王▲ 人類の神に加護を求む▲ 人類の胸中に私語する陰險なる私語者の災厄に対して▲<sub>四・五</sub> 並に幽鬼と人間との災厄に対して』▲<sub>六</sub>

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com